

## 解題

松 永 知 海

### はじめに

鉄眼禪師(写真<sup>2</sup>)が刊行した『黄檗版大藏経』の目録は、<sup>(1)</sup>従来その刊行底本とした『万暦版大藏経』正蔵(以下『万暦版』と略称)の目録をそのままに覆刻して編纂した『大明三蔵聖教目録』をもつて代用されてきた。『黄檗版大藏経』の目録として作成されたものとしては、昭和六十三年に刊行された『上越教育大学図書館所蔵黄檗鐵眼版一切經目録』がはじめである。<sup>(2)</sup>以後個別の所蔵になる『黄檗版大藏経』の目録が作成されてきたが、いまだにその全容が明らかになっていないことを以前から指摘してきた。その意味で、ここに初刷の明らかな正明寺経蔵の目録を刊行する意義は『黄檗版大藏経』刊行の変遷を知る上で大きいといえよう。

### 一、正明寺の概要について

正明寺は滋賀県日野町松尾にあって、法輪山正明寺という(写真<sup>3</sup>)。寺伝によれば、<sup>(3)</sup>その創建は聖徳太子と伝えられ、その後中世には天台宗と

なるが、織田信長の戦火により堂宇を焼失したという。江戸時代になり永源寺管長一絲文守は、村人頼宮宗右衛門の発願による正明寺再興に尽力し、銀子二百枚と御所の清涼殿の古材を賜り竣工するが、完成前の正保三年(一六四六)に文守は示寂した。寛文四年(一六六四)黄檗僧龍溪が住持となつた。龍溪は後水尾院(写真<sup>1</sup>)の帰依厚く、その入山に先立ち拝謁を仰せ付けられ、またこの年の四月には進講して梅檀香十斤及び黄金絹帛等を下賜されたという。さらに寛文七年四月十八日には宸筆の「正明寺」の額を賜つた。寛文九年には齋堂が新営され、その後寛文十二年第二代寂宗禅師住持とき大藏経の勅賜があり、延宝六年(一六七八)、鉄眼禪師が「表」をもつて新刷の大藏経の一部を献上し、さらにこの正明寺に下賜された。

正明寺は龍溪が住持となり、その後ほぼ五十年間に仏殿(千手観音立像および脇侍)、禅堂、齋堂(地藏尊像)、開山堂、庫裡、経蔵、方丈、鐘楼、浴室等が順次造営され七堂伽藍を備えた大刹となつたのである。

## 二、後水尾法皇の蔵本寄進

周知のように、鉄眼禪師が『黄檗版大藏経』の刊行のために創建した黄檗山宝蔵院には現在もその版木が保存されている。その住持であった赤松晋明師はその著『鉄眼』<sup>(4)</sup>で、

延宝六年の秋、大藏経開刻の大業が、略竣功を告げたので、鉄眼は予ての念願通り、その初刷の一部を謹製し、七月十七日表を具して 後

水尾太上法皇に奉進した事は、既に述べたが、この経本はその後、近江国蒲生郡日野町の正明寺に下し賜ふた。この正明寺は、太上法皇の勅願所であつて、黄檗伝来、黄檗山開創などに、尤も力を尽したかの名高い龍溪禪師の開く処である。御下賜にあづかつた鉄眼版初刷の大藏経は今尚ほ同寺の経蔵に保存せられてゐる。

と記している。後水尾法皇は寛文七年に金子・舍利塔・寺号勅額を寄進して、その年の十一月に龍溪から嗣法している。延宝六年の秋、鉄眼禪師が表を具して後水尾太上法皇に奉進した事は、その『黄檗版大藏経』目録である『大明三藏聖教目録』<sup>(5)</sup>に述べられているとおりである。またその経本がその後、近江国蒲生郡日野町の正明寺に下賜された事は『鉄眼禪師假字法語』に所収されている弟子が語る鉄眼禪師の生涯<sup>(6)</sup>によれば、

これより年月ますますつとめて功をとぐ。いよいよ其名かくるるに所なし。延宝六とせ文中のなぬかつみに此事いともかしこく 仙院に聞あげて表をすすめて奉るべきよしになりぬ。あまつさへあふみの国勅願の御寺正明の道場に御経ををさめたまへり。

とある。その納本された折の感激は「随喜偈」<sup>(7)</sup>によつても明らかなくところである。また、正明寺調査によると、延宝六年には全蔵の摺本ではなく、

その後にも何度かの納本により完納されてきたことが、經典卷末の刊記や記録類によつて明らかになつてきた。正明寺蔵本の『幻化網大瑜伽教十忿怒明王大明觀想儀軌經』巻一卷末によれば、延宝八年六月が最も新しい刊記であつて、全蔵の完成は天和元年と考えられる。<sup>(8)</sup>

## 三、経蔵の現況

後水尾法皇より下賜された『黄檗版大藏経』を納める経蔵は、桁行三間奥行三間の瓦葺きで、本堂の東南東の方向にある。そこは本堂に向かい右手の禅堂脇を通り、放生池を渡つた高台である。このことは本堂等の建物と隔てて火難を防ぎ、さらに万が一の時にも池水をもつて延焼に備えた所であり、まさに至宝を永代に伝える絶好の立地に建立された経蔵といつてよい。

### a 経蔵の函配置

経蔵(写真4)は西向きに建てられ、南北には戸口を設けて、東には障子の窓があり通気よく、また内部は、中央四本の柱を結ぶ正方形の四辺に高床式で桐の引出しの棚があり、そこに經典が帙毎に納められている。各面は六列九段であるが、北側と南側とは左右の一行は飾りの引出しであり、実際には西側面六列九段、北側面四列九段、東側面六列九段、南側面四列九段である。

正明寺経蔵の引出桐函に墨書されている千字文(基本的に帙の千字文に対応)は表1のとおりである(写真5・6・7)。

表1

五 體賓	四 伏迓	三 章黎	二 問拱	三一 周湯	九 陶吊	八 位有	七 乃衣	六 始文	五 鳥人	四 龍火	三 河潛	二 菜薑	二一 夜珍	九 劍闕	八 麗出	七 露霜	六 調騰	五 閏歲	四 暑收	三 辰張	二 洪月	西一 天黃
六一 慶	九 惡福	八 習禍	七 谷聲	六 形正	五 作建	四 維尅	三 詩羊	二 難悲	五一 信覆	九 靡己	八 莫談	七 必得	六 男良	五 慕	四 豈毀	三 恭鞠	二 髮五	四一 方	九 頰	八 場被	七 豈駒	六 王鳳
六 以	五 從	四 優攝	三 甚竟	二 業基	二一 慎	九 誠	八 定	七 辭	六 若	五 映	四 淵	三 流	二 之	北一 馨	九 清	八 夙	七 深	六 忠盡	五 敬竭	四 父曰	三 陰	二 非
二 東	東一 都	九 堅好	八 逐	七 守	六 心	五 靜	四 顛匪	三 離廉	二 側次	四一 規慈	九 分磨	八 連交	七 懷弟	六 猶兒	五 諸伯	四 入母	三 隨傳	二 夫	三一 和	九 禮尊	八 樂	七 而
七 千高	六 八家	五 槐卿	四 羅路	三 壁經	二 藁漆	三一 聚英	九 墳	八 明	七 左	六 廣	五 轉右	四 陞陞	三 鼓吹	二 對設	二一 傍	九 彩丙	八 禽	七 驚	六 樓	五 宮	四 渭	三 背面
三 會盟	二 滅	六一 假	九 魏	八 霸	七 晉	六 寔	五 多	四 密	三 丁	二 說武	五一 回	九 扶	八 公合	七 微營	六 奄曲	五 佐阿	四 刻伊	三 策實	二 車肥	四一 纓修	九 穀	八 輦
八 稼畝	七 農	六 治	五 巖杏	四 曠	三 鉅洞	二 碣	二一 昆	九 田	八 紫	七 云雁	六 岱禪	五 嶽	四 郡	三 跡	二 州	南一 丹青	九 沙馳	八 宣威	七 軍精	六 翦用	五 弊刑	四 遵法
			九 目錄	八	七	六 納經	五 慈悲道場懺法	四 慈悲道場懺法	三 奉	二 遠	四一 庭	九 野	八 石	七 城池	六 鷄	五 密多	四 合弱	三 史	二 孟敦	三一 勸黜	九 藝貢	

その國內に納められている經典の千字文を列記すれば、表2のようになる。

表2

西一一 天地玄 黄宇宙	五 體率 賓歸	九 惡積 福緣善	四 優登仕 攝職
二 洪荒日 月盈昃	六 王鳴 鳳在	六一一 慶尺璧	五 從政存
三 辰宿列 張寒來	七 樹白 駒食	二 非寶寸	六 以甘棠去
四 暑往秋 收冬藏	八 場化 被草木	三 陰是競資	七 而益詠
五 閏餘成 歲律呂	九 賴及萬	四 父事君 曰嚴與	八 樂殊貴賤
六 調陽雲 騰致雨	四一一 方蓋蓋此身	五 敬孝當 竭力	九 禮別 尊卑上
七 露結爲 霜金生	二 髮四大 五常	六 忠則 盡命臨	三一 和下睦
八 麗水玉 出崑岡	三 恭惟 鞠養	七 深履薄	二 夫唱婦
九 劔號巨 闕珠稱	四 豈敢 毀傷女	八 夙興溫	三 隨外受 傅訓
二一一 夜光果 珍奈	五 慕貞潔	九 清似蘭斯	四 入奉 母儀
二 菜重芥 薑海鹹	六 男効才 良知過	北一一 馨如松	五 諸姑 伯叔
三 河淡鱗 潜羽翔	七 必改 得能	二 之盛川	六 猶子比 兒孔
四 龍師 火帝	八 莫忘罔 談彼短	三 流不息	七 懷兄 弟同氣
五 鳥官 人皇	九 靡恃 己長	四 淵澄取	八 連枝 交友投
六 始制 文字	五一一 信使可 覆器欲	五 映容止	九 分切 磨箴
七 乃服 衣裳推	二 難量墨 悲絲染	六 若思言	四一一 規仁 慈隱
八 位讓國 有虞	三 詩讀羔 羊景行	七 辭安	二 惻造 次弗
九 陶唐 吊(弔) 民伐罪	四 維賢 尅念	八 定篤初	三 離節義 廉退
三一 周發殷 湯坐朝	五 作聖德 建名立	九 誠美	四 顛沛 匪虧性
二 問道垂 拱平	六 形端表 正空	二一一 慎終榮	五 靜情逸
三 章愛育 黎首臣	七 谷傳 聲虛堂	二 業所 基籍	六 心動神疲
四 伏戎羌退 迹壹	八 習聽 禍因	三 甚無 竟學	七 守真志滿

<p>八 逐物意移</p> <p>九 堅持雅操 好爵自縻</p> <p>東一一 都邑華夏</p> <p>二 東西二京</p> <p>三 背邛面洛浮</p> <p>四 渭據涇</p> <p>五 宮殿盤鬱</p> <p>六 樓觀飛</p> <p>七 驚圖寫</p> <p>八 禽獸畫</p> <p>九 彩仙靈 丙舍</p> <p>二一一 傍啓甲帳</p> <p>二 對楹肆筵 設席</p> <p>三 鼓瑟 吹笙</p> <p>四 陞階納 陸弁</p> <p>五 轉疑星 右通</p> <p>六 廣內</p> <p>七 左達承</p> <p>八 明既集</p> <p>九 墳典亦</p> <p>三一 聚群 英杜</p> <p>二 藁鍾隸 漆書</p> <p>三 壁經 府</p>	<p>四 羅將相 路俠</p> <p>五 槐 卿戶封</p> <p>六 八縣 家給</p> <p>七 千兵 高冠陪</p> <p>八 輦驅</p> <p>九 轂振</p> <p>四一一 纓世祿 侈富</p> <p>二 車駕 肥輕</p> <p>三 策功茂 實勒碑</p> <p>四 刻銘礪溪 伊尹</p> <p>五 佐時 阿衡</p> <p>六 奄宅 曲阜</p> <p>七 微且孰 營桓</p> <p>八 公匡 合濟弱</p> <p>九 扶傾綺</p> <p>五一一 回(迴) 漢惠</p> <p>二 說感 武</p> <p>三 丁俊父</p> <p>四 密勿</p> <p>五 多士</p> <p>六 寔寧</p> <p>七 晉楚更</p> <p>八 霸趙</p>	<p>九 魏困橫</p> <p>六一 假途</p> <p>二 滅鏡踐土</p> <p>三 會 盟何</p> <p>四 遵約 法韓</p> <p>五 弊煩 刑起</p> <p>六 翦頗牧 用</p> <p>七 軍最 精</p> <p>八 宣 威</p> <p>九 沙漠 馳譽</p> <p>南一一 丹 青九</p> <p>二 州禹</p> <p>三 跡百</p> <p>四 郡秦并</p> <p>五 嶽宗恒</p> <p>六 岱 禪主</p> <p>七 云亭 雁門</p> <p>八 紫塞鷄</p> <p>九 田赤城</p> <p>二一一 昆池</p> <p>二 碣石</p> <p>三 鉅野 洞庭</p> <p>四 曠遠縣邈</p>	<p>五 巖岫 杳冥</p> <p>六 治本於</p> <p>七 農務茲</p> <p>八 稼穡俶載南 畝我</p> <p>九 藝黍稷稅熟 貢新</p> <p>三一 勸賞 黜陟</p> <p>二 孟軻 敦素</p> <p>三 史</p> <p>四 合濟 弱扶</p> <p>五 密勿 多士</p> <p>六 鷄田赤</p> <p>七 城昆 池碣</p> <p>八 石</p> <p>九 野</p> <p>四一一 庭</p> <p>二 遠</p> <p>三 奉加</p> <p>四 慈悲道場懺法</p> <p>五 慈悲道場懺法</p> <p>六 納經</p> <p>七</p> <p>八</p> <p>九 目錄</p>
--	--	--	--

b 經典の冊数と巻数

『黄檗版大藏經』の巻数と冊数は二〇九四冊二七五帙といわれる。<sup>(9)</sup>千字文の「天」より「塞」までの六九三字に対応させ經典を排列しているから、巻数を数える場合は一字につき一〇巻をあて、六九三〇巻とする。それらを二七五帙に納め、さらに全藏もしくは大般若を除く經典を購入した寺院には鉄眼禪師ならびに宝洲禪師の語録壹函や刻藏縁起壹函を付して納本している場合もある。

ところで、正明寺藏本は二〇七〇冊二七五帙と『大明三藏聖教目錄』一帙二冊と『華嚴經合論』四〇冊合計二一一三冊である。また『黄檗版大藏經』として下賜された以外に、写本や儀式などに使われたと思われる典籍が四十七冊ある。それらは、表3の通りである。

表3

所在函	冊	典籍名	巻数	丁数		
南四一四	一	慈悲道場懺法序 全一〇巻に朱筆句読点あり	〇	四		
		慈悲道場懺法	一	二六		
		慈悲道場懺法	二	一八		
		慈悲道場懺法	三	二三		
		慈悲道場懺法	四	二〇		
		慈悲道場懺法	五	一八		
		慈悲道場懺法	六	一七		
		慈悲道場懺法	七	一七		
		慈悲道場懺法	八	一七		
		慈悲道場懺法	九	二一		
		慈悲道場懺法	一〇	二三		
		二		卷末「正明」朱印		
		刊記「京上 元旨岡寂樓敬書／銅駝坊書肆田原氏				

所在函	冊	典籍名	巻数	丁数		
南四一四	一	慈悲道場懺法序	〇	四		
		慈悲道場懺法	一	二六		
		慈悲道場懺法	二	一八		
		慈悲道場懺法	三	二三		
		慈悲道場懺法	四	二〇		
		慈悲道場懺法	五	一八		
		慈悲道場懺法	六	一七		
		慈悲道場懺法	七	一七		
		慈悲道場懺法	八	一七		
		慈悲道場懺法	九	二一		
		慈悲道場懺法	一〇	二三		
		二		卷末「正明」朱印		
		刊記「京上 元旨岡寂樓敬書／銅駝坊書肆田原氏				

  

所在函	冊	典籍名	巻数	丁数		
南四一四	三	慈悲道場懺法序	〇	四		
		慈悲道場懺法	一	二六		
		慈悲道場懺法	二	一八		
		慈悲道場懺法	三	二三		
		慈悲道場懺法	四	二〇		
		慈悲道場懺法	五	一八		
		慈悲道場懺法	六	一七		
		慈悲道場懺法	七	一七		
		慈悲道場懺法	八	一七		
		慈悲道場懺法	九	二一		
		慈悲道場懺法	一〇	二三		
		刊記「京上 元旨岡寂樓敬書／銅駝坊書肆田原氏				

  

所在函	冊	典籍名	巻数	丁数		
南四一四	四	慈悲道場懺法序	〇	四		
		慈悲道場懺法	一	二六		
		慈悲道場懺法	二	一八		
		慈悲道場懺法	三	二三		
		慈悲道場懺法	四	二〇		
		慈悲道場懺法	五	一八		
		慈悲道場懺法	六	一七		
		慈悲道場懺法	七	一七		
		慈悲道場懺法	八	一七		
		慈悲道場懺法	九	二一		
		慈悲道場懺法	一〇	二三		
		刊記「京上 元旨岡寂樓敬書／銅駝坊書肆田原氏				







南四一七	一一	師子林天如和尚語錄叙(一一四)・目錄(五丁)	〇	五
	一二	師子林天如和尚語錄(二一三九丁)	一	二
	一三	師子林天如和尚語錄(四〇一八二丁)	二	八二
	一四	師子林天如和尚語錄(二一三三丁)	三	三三
	一五	師子林天如和尚語錄(二一五九丁)	四	七二
	一六	師子林天如和尚語錄(六〇一七二丁)	五	七二
	一七	師子林天如和尚語錄(一一一九丁)	六	七一
	一八	師子林天如和尚語錄(二〇一五九丁)	七	七一
	一九	師子林天如和尚語錄(六〇一七二丁)	八	六〇
	二〇	師子林天如和尚語錄(二九一六〇丁)	九	三三
	二一	師子林天如和尚語錄(一一三三丁)	一〇	三三
	二二	天女則神師經錄	一	二
	二三	天女則神師經錄	二	三
	二四	天女則神師經錄	三	四
	二五	天女則神師經錄	四	三
	二六	天女則神師經錄	五	二
	二七	天女則神師經錄	六	一
	二八	天女則神師經錄	七	〇
	二九	天女則神師經錄	八	一
	三〇	天女則神師經錄	九	二
	三一	天女則神師經錄	一〇	三
	三二	天女則神師經錄	一一	四
	三三	天女則神師經錄	一二	五
	三四	天女則神師經錄	一三	六
	三五	天女則神師經錄	一四	七
	三六	天女則神師經錄	一五	八
	三七	天女則神師經錄	一六	九
	三八	天女則神師經錄	一七	一〇
	三九	天女則神師經錄	一八	一一
	四〇	天女則神師經錄	一九	一二
	四一	天女則神師經錄	二〇	一三
	四二	天女則神師經錄	二一	一四
	四三	天女則神師經錄	二二	一五
	四四	天女則神師經錄	二三	一六
	四五	天女則神師經錄	二四	一七
	四六	天女則神師經錄	二五	一八
	四七	天女則神師經錄	二六	一九
	四八	天女則神師經錄	二七	二〇
	四九	天女則神師經錄	二八	二一
	五〇	天女則神師經錄	二九	二二
	五一	天女則神師經錄	三〇	二三
	五二	天女則神師經錄	三一	二四
	五三	天女則神師經錄	三二	二五
	五四	天女則神師經錄	三三	二六
	五五	天女則神師經錄	三四	二七
	五六	天女則神師經錄	三五	二八
	五七	天女則神師經錄	三六	二九
	五八	天女則神師經錄	三七	三〇
	五九	天女則神師經錄	三八	三一
	六〇	天女則神師經錄	三九	三二
	六一	天女則神師經錄	四〇	三三
	六二	天女則神師經錄	四一	三四
	六三	天女則神師經錄	四二	三五
	六四	天女則神師經錄	四三	三六
	六五	天女則神師經錄	四四	三七
	六六	天女則神師經錄	四五	三八
	六七	天女則神師經錄	四六	三九
	六八	天女則神師經錄	四七	四〇
	六九	天女則神師經錄	四八	四一
	七〇	天女則神師經錄	四九	四二
	七一	天女則神師經錄	五〇	四三
	七二	天女則神師經錄	五一	四四
	七三	天女則神師經錄	五二	四五
	七四	天女則神師經錄	五三	四六
	七五	天女則神師經錄	五四	四七
	七六	天女則神師經錄	五五	四八
	七七	天女則神師經錄	五六	四九
	七八	天女則神師經錄	五七	五〇
	七九	天女則神師經錄	五八	五一
	八〇	天女則神師經錄	五九	五二
	八一	天女則神師經錄	六〇	五三
	八二	天女則神師經錄	六一	五四
	八三	天女則神師經錄	六二	五五
	八四	天女則神師經錄	六三	五六
	八五	天女則神師經錄	六四	五七
	八六	天女則神師經錄	六五	五八
	八七	天女則神師經錄	六六	五九
	八八	天女則神師經錄	六七	六〇
	八九	天女則神師經錄	六八	六一
	九〇	天女則神師經錄	六九	六二
	九一	天女則神師經錄	七〇	六三
	九二	天女則神師經錄	七一	六四
	九三	天女則神師經錄	七二	六五
	九四	天女則神師經錄	七三	六六
	九五	天女則神師經錄	七四	六七
	九六	天女則神師經錄	七五	六八
	九七	天女則神師經錄	七六	六九
	九八	天女則神師經錄	七七	七〇
	九九	天女則神師經錄	七八	七一
	一〇〇	天女則神師經錄	七九	七二

c 初刷の特徴  
 正明寺藏本を、『大明三藏聖教目録』の正藏と比較してみると、表4の  
 経典が欠経である。<sup>10)</sup>

南四一八	一	仁王般若経 上巻 慈海末順校合 折本刊本	一
	二	仁王般若経 下巻 慈海末順校合 折本刊本	二
南四一九	一	大明三藏聖教目録 上下合巻	一
	二	「再住中岳置正明常住」墨書朱印	二
	三	大明三藏聖教目録 卷一・二欠	三
	四	大明三藏聖教目録	四
	五	大明三藏聖教目録	五
	六	大明三藏聖教目録	六
	七	大明三藏聖教目録	七
	八	大明三藏聖教目録	八
	九	大明三藏聖教目録	九
	一〇	大明三藏聖教目録	一〇
	一一	大明三藏聖教目録	一一
	一二	大明三藏聖教目録	一二
	一三	大明三藏聖教目録	一三
	一四	大明三藏聖教目録	一四
	一五	大明三藏聖教目録	一五

表4

箱位置	經典番号	帙次	帙号	經典名	千字文	箱漢字	卷数
西三一三	八四	四二	二二下	大方廣佛華嚴經 八十卷本		(首)	六八・七〇
西四一八	三五二	六六	三五上	佛說出生無量門持經 佛陀跋陀羅譯	莫七	(二一・二四丁)	一
西五一三	四五八	七五	三九下	師子莊嚴王菩薩請問經	景五	(路二) (帙十)	一
東三一四	一四六七	一八四	一一二下	諸經要集 道世撰		(合濟弱)	一・三〇
東四一八	一五一七	二〇八	二二五下	景德傳燈錄 道原纂		(扶)	一
東四一九	一五一八	二〇九	一一二六	六祖大師法寶壇經 宗寶編		(芸黍)	一・二
南二一九	一六三二	二六〇	一六二上	禪門寶訓集 淨善重集		(稷稅熟)	一・三〇
南二一九	一六三三			大方廣佛華嚴經疏鈔			

このうち、千字文の「稷稅熟」にある『大方廣佛華嚴經疏鈔』は宝永のはじめ頃までは未だ刊行されていなかったことがわかっている<sup>(11)</sup>。他に、初刷の正明寺と相前後して摺印されたと考えられる金戒光明寺蔵本でも『佛說出生無量門持經』が欠経である。『黄檗版大蔵経』正蔵には蔵外典籍はほとんどなく、『華嚴經合論』百二十巻のみである。真言宗新安流の祖と仰がれる淨嚴が、鉄眼禪師に要請し出版された秘密儀軌類をはじめとした蔵外典籍はない<sup>(12)</sup>。

#### d 正明寺本丁数が少ない例

『大乘入楞伽經』三巻正明寺本は二十四丁までで、二十五丁がないが、法然院本には二十五丁があつて、音釋の一部および刊記がある。金戒光明寺本も二十五丁がないから丁合いを間違えて落丁と考えるよりも、この二十五丁がまだ未刻であつたと考えたほうがよいであろう。

『增壹阿含經』三十四巻について、正明寺本は二十一丁であるが、金戒

光明寺本には二十二丁に音釈がある。同じく『增壹阿含經』四十五巻について、正明本は音釋があるものの二十三丁であるが金戒光明寺本では二十四丁に三行分の音釈がある。

『經律異相』巻一巻末についてみると、正明寺本は刊記部分が未刻であるが、金戒光明寺本は未刻部分に刊記および版心の千字文巻次が刻まれている。その千字文巻次も誤つて「経四」と刻んでいる。ところが法然院本には刊記があり、版心にも「経一」とあるから、すぐに訂正されたのであろう(写真11・12)。

逆に正明寺本の丁数が一丁多い(カッコ内は金戒光明寺蔵本)箇所を『大般若波羅蜜多經』で列記すると、三三箇所ある。

- 二一四巻二十(十九) 二二八巻二十一(二十)
- 二二七巻二十一(二十) 二四〇巻十九(十八)
- 二四四巻二十二(二十一) 二五〇巻二十(十九)

二六八卷二十(十九)	二七一卷二十(十九)
二七二卷十九(十八)	二七七卷二十二(二十二)
二七八卷二十(十九)	二八八卷十九(十八)
三〇五卷十九(十八)	三七四卷二十一(二十一)
四一五卷二十一(二十)	四一六卷二十二(二十二)
四三三卷二十(十九)	四三三卷二十一(二十)
四四〇卷二十(十九)	四四四卷二十一(二十)
四五四卷二十一(二十)	四四五卷二十一(二十)
四七七卷二十一(二十)	四八三卷二十一(二十一)
四九一卷二十一(二十)	四九九卷二十一(二十一)
五二七卷二十二(二十一)	五四二卷二十一(二十一)
五四七卷二十一(二十)	五四八卷二十二(二十二)
五五一卷二十三(二十二)	五八一卷二十(十九)
五八四卷二十(十九)	

これらの一丁分にはいずれも刊記が摺印されている。原則として『黄檗版大藏経』は一枚の版木に四丁分を刻んでいるから、刊記を摺印しなかつたとも、刊記が未刻であつたとも考えられる。あるいは摺印したが製本しなかつたとも考えられるが、結論は今後の課題としたい。

『佛説寶雨経』には乱丁があり十六丁で刊記があるが、その後「此六」の第十七丁が挿入されている。同様の乱丁は金戒光明寺本にもみえる。偶然し箇所を間違えたというよりも同じ束での丁合い間違いとも考えられる。

〔1〕底本が後摺印本と異なる例。

『黄檗版大藏経』は従来初刷から今日に至るまで同一の版木、もしくは

同一の新版によって摺印されてきたと考えられてきたが、万暦版以外の底本による和刻本があり、次第に万暦版へと改刻がすすんできたことが明らかになってきた。今一度、それらの事例を挙げてみよう。『大般涅槃経』・『大智度論』・『成唯識論』・『諸經要集』・『大唐西域記』・『妙法蓮華經玄義』・『妙法蓮華經文句』・『大乘止觀法門』・『注維摩詰經』の典籍である。<sup>(13)</sup>

以下も正明寺本は和刻本であるが、後摺り本は万暦版に改刻されている例である。

(1) 『十住毘婆沙論』は正明寺本・金戒光明寺本ともに寛文六年和刻刊本であるが、法然院本は万暦版底本の刊本である(写真13)。

(2) 『涅槃經疏』は正明寺本・金戒光明寺本・法然院本・貞照院本ともに和刻本であるが、延享二年以降は万暦版底本に改刻されている。

(3) 『大方廣佛華嚴演義鈔』は正明寺本、金戒光明寺本、法然院本ともに和刻本である。しかし大谷大学所蔵丹山副本や大正大学本は万暦版が底本となっている。

(4) 『大佛頂如來密因修証了義諸菩薩萬行首楞嚴經會解』は正明寺本、法然院本の底本は寛永二十年に平樂寺が開板した和刻本である。大正大学本、大谷大学丹山本はともに万暦版底本に返り点送仮名を付ける。

(5) 『大方廣圓覺經略鈔』は正明寺本・法然院本の底本ともに慶安元年(一六四八)に敦賀屋久兵衛が刊行した和刻本を底本としている。大谷大学丹山本は万暦版底本であるが、版心千字文は『万暦版』とずれているが、万暦版にはある『大方廣圓覺經略疏科』治一の科文が一卷分ないためである。

〔2〕底本は同じ『万暦版』であるが、千字文卷次が後摺印本と異なるものがある。

(1) 千字文「伐」一十について<sup>(14)</sup>、正明寺本・金戒光明寺本では『阿差末菩薩經』七卷が「伐一七」(写真14)で『般舟三昧經』三卷(写真15)が「伐八十」にある。法然院本は『般舟三昧經』が「伐一三」で『阿差末菩薩經』が「伐四十」である。『大明三藏聖教目錄』および『万曆版』は法然院本と一致している。

(2) 『大乘大方等日藏經』第四卷十八丁について、正明寺本は卷末に校譌があつて音釈がある。金戒光明寺本・法然院本ともに校譌なく尾題のあととすぐに音釈がくる。これは黄檗宝藏院版本と同じである(写真16)。

(3) 正明寺本は『原人論』が首題、返り点送り仮名なく、「跡七」の千字文巻次あり。法然院本の首題は『華嚴原人論』で、千字文巻次なく返り点送り仮名あり(写真17)。

(4) 『薬師瑠璃光七佛本願功德經』からの千字文巻次についての相違がある。

表5

	万曆版	正明寺本	大谷大学 丹山本
『薬師瑠璃光七佛本願功德經』卷上	惟三	惟三	惟三
『薬師瑠璃光七佛本願功德經』卷下	惟四	惟四	惟四
『佛説阿闍世王經』卷上	惟五	惟五	惟六
『佛説阿闍世王經』卷下	惟六	惟六	惟七
『楞伽阿跋多羅寶經』卷一	惟七	惟八	惟八

(5) 同様の千字文巻次について、正明寺本は「綺三」が重複している。

(6) 正明寺本は和刻本底本であるが、大谷大学蔵本などの後印本は『万曆版』を底本としているものの、『輔教編』の千字文「漢一」から「漢三」まで

が『圓悟佛果禪師語録』の千字文「漢一」より「漢三」までと重複している。<sup>(15)</sup>

(3) 底本は同じ『万曆版』で版本も同一だが削除や未刻か既刻の違いがある例として、基本的には刊記の有無があるが、それ以外にはつぎのような例がある。<sup>(16)</sup>

(1) 『佛説大灌頂神呪經』の千字文「恭三」について、巻五と巻六との二巻同巻である。正明寺本(金戒光明寺本も同一)二十丁から二十二丁の版心丁数は「九」「十」「十一」としている。これらは乱丁ではなく巻六の初丁から数えた丁数を彫ったものであるが、後摺本は正しく「二十」「二十一」「二十二」と丁数を記している(写真18)。

ちなみに、『万曆版』では一から十一丁までが巻五で、十二丁から二十二丁までが巻六である。

(2) 『月燈三昧經』の千字文「女六」について、巻五と巻六との二巻同巻である。正明寺本五丁から八丁は正しく「女六」であるが、一丁から四丁は「七」を「六」の第3筆目を削る。九丁から十二丁は「七」、十三丁から二十八丁は「六」、二十九丁は「女十」としている。後摺本は正しく「女六」としている(写真19)。

(3) 『法顯傳』巻一の三十四丁十一行八字目一字分は正明寺本・法然院本は未刻であるが、後摺り本には「下」が入る(写真20)。

(4) 『佛説陀羅尼集經』巻九について正明寺本は三十二丁である(写真21)。金戒光明寺本は三十三丁で未刻部分が八字分ある(写真22・23)。しかし法然院本を含め後摺り本は三十三丁で未刻部分(黒羊毛作素結・作、首)はない。

(5) 『佛説華手經』 卷二の卷末の音釋に正明寺本は一字分の未刻があるが、法然院では「泄」の1字あり(写真24)。

(6) 『歴代三寶紀』 第十二卷一丁四行第一九字目の一字分は正明寺本は未刻であり、法然院本も未刻であるが、後摺り本は「競」の字がある(写真25)。

(7) 『歴代三寶紀』 第十五卷第十九紙十二行第十一字目一字分及び第二十一丁九行第十二字十三字の二字分、法然院本も未刻である(写真26・27)が「乗」<sup>17</sup>「二十」が後摺り本には刻まれている。

(8) 『大方廣佛華嚴經』 第二十九卷の刊記部分について、正明寺本は周圍一部および千字文卷次が未刻であるが、法然院では枠の二重の界線も含め刻まれている(写真28)。

(9) 『佛説大集法門經』 の首題下に未刻部分が正明寺本にはある(写真29)が、後印本には未刻部分と「第」の計五字分を削除して「單譯經」三字だけを残す。

〈4〉明万曆版大藏經に入蔵されていない経典がある

(1) 『佛説阿彌陀經疏』 元暉述は千字文卷次「貞四」と「百七」にあり、本文は全同であるが「貞四」は返り点送り仮名あり(写真30)、「百七」は返り点送り仮名はない(写真31)。また卷末の音釈について「貞四」には二箇所<sup>18</sup>の未刻がある(写真32)が、「百七」には刻まれている(写真33)。  
『大明三藏聖教目錄』 によれば本来この疏は「百」にあるべきもので、称名寺と安福寺の明蔵にも「貞四」の疏はない。<sup>17</sup> また金戒光明寺にも法然院にも「貞四」に疏はない。

(2) 『經律異相目錄』 をみると、版心の千字文は未刻で、『万曆版』の安福寺や稱名寺の蔵本にこの目錄はない(写真34)。

〈5〉明万曆版大藏經に入蔵されてある経典がない

(1) 『大乘起信論』 は正明寺本の題簽には三卷二訳とあるが、眞諦譯の一卷のみあつて實又難陀譯の二巻本がない。安福寺・稱名寺の『万曆蔵』本で確認すると、「情八」「情九」「情十」に三卷二訳がある。金戒光明寺本には正明寺本と同じく二巻本の實又難陀譯は欠本である。法然院本には「情八」に實又難陀譯、「情九」は欠本で「情十」に眞諦譯がある。真別處本は千字文卷次すべて「情十」である(写真35)。

(2) 前述したように、一六三三『大方廣佛華嚴經疏鈔』 三十巻は初期の黄檗版にはない。

(3) 三五二『佛説出生無量門持經』 一卷は金戒光明寺本にも欠本である。

(4) 一五一七『景德傳燈錄』 三十巻は金戒光明寺本には存経。

(5) 一五一八『六祖大師法寶壇經』 一卷は金戒光明寺本には存経。

(6) 一六三二『禪林寶訓』 四巻は金戒光明寺本には『禪林寶訓集』 二巻あり。

〈6〉その他

『大方廣圓覺經略鈔』 には、朱筆にて送り仮名と返り点が付されている(写真36)。

以上初刷の『黄檗版大藏經』 の特徴を縷述してきたが、その特徴は、四点にまとめられる。

第一には、『万曆版』 を底本としない和刻本のあることが挙げられる。異版といわれているものであるが、それらの中で、後の『黄檗版大藏經』 では『万曆版』 底本の摺本になっている一群の典籍がある。『十住毘婆沙論』 はその好例で、正明寺本は寛文六年刊本で、『高麗版』 を底本とした和刻本

である。この異版が多いことは出版の初期、鉄眼禪師による開版が基本であったが、その一方で既に開版されていた万暦版の版木も含め和刻本を入れ版として使用している。

第二には、『万暦版』に入蔵されていない千字文巻次の經典がある。『阿彌陀經疏』「貞四」は『万暦版』にない。この理由は不明であるが、新たな開版をわざわざ行つたとも考えにくいので、第一にあつた既刻の和刻本版木にあつたのでそのまま入蔵したと考えるのが妥当であろう。

第三には、明万暦版大藏經に入蔵されてある經典がない。『大方廣佛華嚴經疏鈔』三十卷（稷稅熟）は万暦版大藏經にはあるが初刷にはない。第二とは逆の場合であつて、なぜ開版がなされずに、正蔵にはない『合論』等の藏外典籍や、淨嚴要請による新たな秘密儀規類などが出版されたのか、不明である。

第四には『佛說大灌頂神呪經』の千字文「恭三」の丁数や、『月燈三昧經』の千字文「女六」について、丁数などの彫り間違いをみると、従来『黄檗版大藏經』は万暦版を張り付けて被せ彫りした覆刻といわれてきたことも事実であるが、必ずしも被せ彫りしたものではないと考えられる。また、『阿差末菩薩經』七卷は正明寺本・金戒光明寺本では「伐一〇七」で『般舟三昧經』三卷が「伐八〇十」にあつたが、万暦版や法然院本は『般舟三昧經』が「伐一〇三」で『阿差末菩薩經』が「伐四〇十」であつた。このことも考え合わせなくてはならないであろう。

現時点でのまとめとすれば、これらの特徴を備えた蔵本は初刷の蔵本とみて間違いのない『黄檗版大藏經』といえよう。管見ではあるが、正明寺本の四点を満たした『黄檗版大藏經』は未見である。ただ第二点は満たさ

ないものの、京都の浄土宗本山金戒光明寺に伝わる蔵本は、ほぼ同時期に摺印されたものであると思われる<sup>(18)</sup>。今後の課題とすれば、初刷の後水尾法皇に献上された『黄檗版大藏經』には、その底本が万暦版か否かは別として、すでに開版のあつた町版による經典も知られている以上にあつたと推定できる。万暦版以外の和刻本は一見してわかるが、同じ万暦版を底本とした出版については『法華經』で検討したような、詳細な摺本の比較が今後必要になる。また同時に現存版本の調査との照合も行われる必要があらうと思う<sup>(19)</sup>。

#### 【註】

- (1) ここでは明『万暦版大藏經』正蔵に対応するもの。『黄檗版大藏經』の定義については『黄檗版大藏經』の再評価<sup>(1)</sup>（『仏教史学』三四卷二号）を参照。
- (2) 『上越教育大学図書館所蔵黄檗鐵眼版一切經目錄』以下の目錄については註11の拙稿に概説する。
- (3) 『正明寺小志』一九二九年十月刊行。
- (4) 『鉄眼』二七二頁一九四三年刊。
- (5) 宝蔵院刊行。
- (6) 岩波文庫四三頁、元禄三年（一六九〇）。
- (7) 『新纂校訂隠元全集』（四九六六頁）には「壬子黄鐘月江州法輪山正明寺寺主寂宗孫住持三載茲蒙 太上法皇賜請藏經老僧聞之因作偈以為助喜云  
法輪欲軋此山中 紫氣騰騰震雅風 天沢広臨大藏海 玉函請賜梵王宮  
喜逢斯際雲龍会 繼起前朝聖徳功 主伴重重無間断 曇花瑞現満堂  
紅」とある。また、高泉禪師『洗雲集』卷十二にも「正明寺募造御賜藏經庫序」がある。
- (8) 『影印黄檗版大藏經刊記集』解題三七七頁（一九九四年三月刊）
- (9) 『黄檗版大藏經』の巻数について（『第5回日中仏教学術会議 発表要旨』）

五八頁一九九四年刊)

(10) なお『番字薬師瑠璃光七佛本願功德經』は目録にはあるものの万暦版に入蔵されていないので、ここには挙げていない。

(11) 内山純子「了翁禪師の一切経寄進と月山寺檀林について」(『曙光山月山寺了翁寄進鉄眼版一切経目録』一五二頁二〇〇一年五月) 拙稿『黄檗版大蔵経』の刊行について(高橋弘次先生古稀記念論集『浄土学佛教学論叢』二〇〇四年十一月)を参照。

(12) 『黄檗版大蔵経』の再評価」参照(『仏教史学』三四卷二号一九九一年三月)。

(13) 九の典籍については、註(11)の拙稿を参照。その他の和刻本出版については註(8)註(12)の拙稿を参照。

(14) 拙稿「黄檗宗宝蔵院所蔵版本について」とくに蔵外典籍を中心とした課題1」の図版2を参照(『香川孝雄博士古稀記念論集佛教学浄土学研究』二〇〇一年三月)。

(15) 註(1)拙稿「黄檗版大蔵経」の再評価」を参照。

(16) 註(8)「刊記一覧」を参照。なお、蔵外の刊記がその他に二件のあることを知った。

一、『教観綱宗』智旭重述 全二十四丁

攝州大坂浄水信士施實刻此／教観綱宗 願依此勝縁普與衆生共開佛之知見悟心之實相／天和元辛酉冬月黄檗山寶蔵院識 沙門鐵眼募刻

二、『教観綱宗釋義』智旭述 全二十八丁

攝州大坂浄水信士施實刻此／教観綱宗釋義／願依此勝縁普與衆生共開佛之知見悟心之實相／天和元辛酉冬月黄檗山寶蔵院識 沙門鐵眼募刻

これにより、鉄眼禪師募縁刊記総数は二二四五件となった。

(17) 未刊行ではあるが、浄土宗総合研究所の調査により柏原市安福寺所蔵の『万暦版』調査報告および『称名寺万暦版一切経調査報告書』(近江八幡市教育委員会編二〇〇二年三月刊)による。

(18) 角野玄樹「金戒光明寺所蔵『黄檗版大蔵経』と経蔵内収蔵庫について」

(『仏教学会紀要』九号、二〇〇一年刊)。

(19) 『万暦版』を底本とした和刻本については、野沢佳美氏の「江戸時代における明版嘉興蔵輸入の影響について」(『立正大学東洋史論集』13号、二〇〇一年刊)があるだけであって、そうした書肆の出版がどのように『黄檗版大蔵経』に入れ版として使われたのか、その有無も含め今後の課題となろう。

また、『大般若波羅蜜經』「冬一」第二百二十一巻の第三丁版心について、正明寺本は「二百二十一」となっているが、現在の摺本の版心は「二百十一」となっている。同じく『大般若波羅蜜經』「岡四」第四百七十四巻の第四百四十七巻となっている。『大般若波羅蜜經』については磨滅等の事情により現在使われていない版木があり、この部分の特徴によりいつごろ新版が彫られたのか、推定できる特徴となろう。この二丁版心については貝葉書院矢野俊行氏にご教示頂いた。

正明寺本『大乘起信論』は真諦譯の一卷一訳だけがあり、千字文「情八」「情九」はない。題僉には三巻二訳という。万暦本は上中下巻の三巻ありとし、安福寺本では上巻十五丁中巻十四丁下巻三十丁である。黄檗初版では實又難陀譯二巻が欠で、真別處本は千字文巻次が三巻すべて「情十」となっており、実又難陀訳は一から二十八丁、真諦訳は一から三十丁(序含む)である。正明寺本『禪門實訓集』の帙に「黍字ノ内禪林實訓四卷合／本ニシテ上下二冊不足」と張紙がある。

### 【写真】

写真1 後水尾法皇の画像(黄檗文華殿)

写真2 鉄眼禪師の像(宝蔵院)

写真3 正明寺本堂

写真4 経蔵全景

写真5 経蔵棚

写真6 経函

写真7 経帙

写真8 『慈悲道場懺法』刊記

写真9 『妙法蓮華經』序 写真右側・西三一八函二冊目、

写真左側・蔵外函本「耆闍崛山」の「山」の

第二画目の角に注目。

写真10 『妙法蓮華經』貞照院本

写真11 『經律異相』巻一卷末、正明寺未刻部分あり。

写真12 『經律異相』巻一卷末、金戒光明寺は刊記があり、この二十四丁

の版心のみ「経四」とするが、法然院本では「経一」となっている。

写真13 『十住毘婆沙論』巻第十七、正明寺本刊記部分。

写真14 『阿差末菩薩經』正明寺本千字文卷次「伐七」。

写真15 『般舟三昧經』正明寺本千字文卷次「伐八」。

写真16 『大乘大方等日藏經』正明寺本 訓点あり、千字文卷次未刻と校

譌未刻あり。

写真17 正明寺本は『原人論』が首題、返り点送り仮名なく、「跡七」の

千字文卷次あり。

写真18 『佛説大灌頂神呪經』の正明寺本(十二・二十二丁)巻六の「恭

三」の二十丁から二十二丁の版心丁数を「九」「十」「十一」としている。

写真19 『月燈三昧經』巻七、第一丁版心。

写真20 『法顯傳』三十四丁。

写真21 『佛説陀羅尼集經』巻第九正明寺本の巻末。

写真22 『佛説陀羅尼集經』巻第九、金戒光明寺本。

写真23 『佛説陀羅尼集經』巻第九、金戒光明寺本。

写真24 『佛説華手經』巻第二、正明寺本。

写真25 『歴代三寶紀』第十二巻一丁の正明寺本。

写真26 『歴代三寶紀』第十五巻正明寺本、第十九紙未刻部分。

写真27 『歴代三寶紀』第十五巻正明寺本、第二十一丁未刻部分。

写真28 『大方廣佛華嚴經』第二十九巻の正明寺本の刊記部分。

写真29 『佛説大集法門經』の首題下に未刻部分が正明寺本にはある。

写真30 『阿彌陀經疏』「貞四」正明寺本巻頭。

写真31 『阿彌陀經疏』「百七」正明寺本巻頭。

写真32 『阿彌陀經疏』「貞四」正明寺本巻末。

写真33 『阿彌陀經疏』「百七」正明寺本巻末。

写真34 『經律異相目錄』正明寺本。

写真35 『大乘起信論』正明寺本題簽。

写真36 『大方廣圓覺經略鈔』序末と巻頭。

#### 〈付記〉

この目録を作成するための調査にあたり、正明寺住持安部梁解禪師には大変お世話になりました。初回は平成五年一月、二回目は平成八年十一月、三回目は平成十三年十二月、四回目は平成十五年八月と四回にまたがり延べ十五日間にも及びました。後水尾法皇の影像是田中智誠主幹のご高配により黄檗文華殿に所蔵されている画像を掲載できました。また鉄眼禪師像は宝蔵院版木庫に安置されている像で、黄檗宗務総長・宝蔵院住持の赤松達明禪師のご許可を頂戴し、掲載できました。さらに初刷の『黄檗版大蔵



「経」を検討するにあたり調査させていただいた各寺院ならびに大学の図書館にはご多忙のなか閲覧の便を計っていただきました。ここに甚深の謝意を申し上げます。加えて、入稿が大幅に遅れご迷惑をおかけしたにもかかわらず「一切経研究班」の成果として刊行して下さいました今堀太逸教授はじめ班員の諸先生、ならびに編集委員会の諸先生・事務局の皆様には厚く御礼を申し上げます。